

「口述」<「文書」ではない。

～オーラル・ヒストリーがひらく、放送史の新たな扉～

メディア研究部 廣谷鏡子

放送史研究はこれまで「文書資料」に基づいて事実関係を記述してきた。『20世紀放送史』などの「正史」(オフィシャル・ヒストリー)は、文書資料の欠如を補うため放送関係者から聞き取りを行って編纂されてきたが、その音声記録は当研究所に多数保存されている。本稿では、その貴重な「口述資料」を、「オーラル・ヒストリー」研究の方法論を用いてよみがえらせる方向性を示す。素材として利用できるのは、700件の証言である。証言の傾向から、「生」ドラマ時代の現場、放送における女性史、放送の国際化という3つのテーマが浮かび上がる。そこでテーマについて、正史がどのような記述をしているか、先行研究がどのような記述をしているかをレビューし、分析に入る。分析の際には、リサーチクエスションを設定し、「正史」との対比、証言が行われた「場」と「発話行為」とに注意する。「口述資料」の「信頼性」についても、文献を挙げて述べる。この研究が放送史の新たな扉をひらくと期待している。

1. 本稿の目的

当研究所では、2003年からテレビ放送の草創期に活動した人々を対象に「放送史への証言」としてインタビューを行い、そのつど本誌に発表してきた。そのようにして蓄積されてきた証言、また、過去に収録された証言は、500件を超える。本稿は、これらの口述資料分析に「オーラル・ヒストリー」の研究方法を用いて、新しい放送史研究の流れを作り出すことを目的とするものである。

放送史研究における「オーラル・ヒストリーとは何か」、ならびに「オーラル・ヒストリーの意味」については、本誌2012年1月号にまとめたので(廣谷鏡子、松山秀明、2012)、ここでは以下のとおり簡単に整理するにとどめる。

これまで放送史研究は、もっぱら文書資料に基づいて事実関係の記述が行われてきたが、史実を裏付ける文書資料が残されているケースは意外に少ない。これは「放送」がメディアとし

ては長い歴史を持たず、まだ十分に検証されてきていないことを示してもいるだろう。放送史研究にとって不可欠なものとなっている『放送五十年史』(日本放送協会編、1977)や『20世紀放送史』(日本放送協会編、2001)といった編年体の書籍資料の編纂の際には、文書資料の欠如を補うため、放送関係者の聞き取り調査を行ってきた。放送の歴史とその背景を正確に把握・理解するには、放送事業の結果や成果を事後的に記録した資料では、それらが生み出された意図や背景、プロセス等の詳細は知り得ないからだ。これらの口述資料は、オープンリールテープ、カセットテープなどの記録媒体に収録されたまま当研究所に保存されているが、証言には分野として偏りがあり、研究資料として十分であるとは言えない。

そこで、これらの貴重な証言資料を放送史研究に価値あるものとしてよみがえらせるとともに、資料が欠落している領域に関わった人たちの証言を新たに収集することが早急に求められ

る。その際に、「オーラル・ヒストリー」の研究方法を有効に活用できれば、文書資料の補完にとどまらない放送史を提示できるのではと期待しているのである。

2. 研究素材について

現在、当研究所に保管されている放送関係者の「証言」は以下のとおりである。

- ①『放送五十年史』用に収録された証言
- ②『20世紀放送史』用に収録された証言
- ③放送史ききがき余話
- ④テレビ創業期の人たちの証言集
- ⑤放送史への証言

また⑥は、外部団体が収録したものであるが、活用可能な証言である。

⑥ 放送人の証言（「放送人の会」所蔵）

それぞれのおもな証言者、証言内容の詳細については、表（38～39ページ）に記した。それぞれの特徴を順次見ていく。

①『放送五十年史』用に収録された証言

『放送五十年史』は、放送開始50周年を記念し、1977年刊行。NHK副会長を委員長とする放送五十年史編集委員会のもとで、1973年から具体的編集作業が始まった。素材のひとつが、1960年頃から1977年にかけて収録された「聞き取り記録」で、音声記録は、オープンリール163巻、カセットテープ138本に及ぶ。証言数は、277件。テープは劣化を防ぐため、すべてデジタル化し保存している。一部テキスト化済み。

「放送半世紀の歩みを国民に対する報告の意をこめて編集」し、ラジオの誕生から成長の時代、戦時体制の始まりから日中戦争、太平洋戦争、終戦、そして戦後の経済成長、東京オリ

ピックから放送開始50年まで、放送がその時代ごとの社会現象を背景に変革していく態様が6章に分けて構成されている。そのため、聞き取り記録には、放送に関わった人たちの証言とともに、日本の政治史や経済史、文化史などについての大学教授の講義なども収録。古いものでは、太平洋開戦前夜、GHQの占領政策などに関わった元情報局担当者による昭和36年の証言があり、戦時下、日本の占領地域の事情について語る放送・技術・管理担当者、アナウンサーらの証言もある。NHKの地域放送局開局時や、戦前の外地放送局（樺太・豊原、パラオなど）の開局準備の様子なども、証言と座談会で当時の担当者（や家族）からきめ細かく収集されている。

②『20世紀放送史』用に収録された証言

『20世紀放送史』は、『放送五十年史』の四半世紀後の2001年刊行。NHK副会長を委員長とする20世紀放送史委員会、当研究所内に20世紀放送史編集室を設け、1996年から編集をスタート。刊行のため、有識者を招いての勉強会とともに、放送史の重要な事柄に携わった当事者へのインタビューを行った。1993年から2000年までの音声記録が、カセットテープ202本に収められている。証言数は158件。デジタル化済み、一部テキスト化済み。

世紀の変わり目を日本の放送にとって大きな歴史的意味があるのとらえ、視聴者からみた放送史という観点や、民放の動向はもとより放送隣接分野も視野に入れた、トータルなメディア史の中での放送、という位置付けで、放送人の顔が見える歴史を目指した。その志は、証言者の顔ぶれにも表れており、収録テープのタイトルが、「現場」に焦点を当てた人選であることを示す。

表 放送関係者の「証言」一覧

①『放送五十年史』用に収録された証言

証言数：277件 収録時期：1960年頃～1977	保存媒体：オープンリール163巻、カセットテープ138本（デジタル化済み、一部テキスト化済み）
おもな証言者	内容
宮本吉夫（元情報局 放送担当）	太平洋戦争開始前夜、大橋会長から高野会長へ、GHQ占領政策
和田信賢（アナウンサー）	ヘルシンキオリンピック大会出発前の座談会
島茂雄（技術）	樺太・豊原放送局の建設関係
土方久功（元南洋庁嘱託）	パラオ開局準備
上田里江（パラオ職員下宿先・商店主）	パラオ局職員の想い出
岡本正一（放送）	馬來放送管理局
倉田三郎（放送）	広島局開局当時、原爆被爆当時の在局者、原爆殉職者の碑、尾道放送局のこと
岡田寿久（技術）	札幌局初代技術部長にきく
高橋善七（郵政100年史編集室長）	郵政100年史
大森幸男（放送評論家）、春原昭彦（日本新聞協会）	放送史構想について
阿部真之助（NHK会長）	会長訓示、受信料制度
山口淳、佐藤邦彦、横井寿郎（放送）ほか	クーパー学校、日本のラジオ・テレビ演出の基礎（座談会）
中村茂（放送）	入局当時の愛宕山、歌舞伎中継、2.26事件
フリードリッヒ・グライル（放送）	入局当時の海外放送、当時のドイツ語班ほか
神谷勝太郎（放送）	海外放送の歩み
林茂（東大教授）	大正末期から数年前までの日本の政治（内政・外交）の概要を講義
坂元彦太郎（元お茶の水女子大教授）	教育放送について
富永謙吾（防衛庁戦史室）	戦争と放送
江藤文夫（評論家）	娯楽・コマーシャル
古垣鉄郎（元NHK会長）	占領下のNHK経営
網島毅（電波監理委員会委員長）	占領政策と放送行政
土岐善磨（放送用語委員）	土岐善磨氏と語る

②『20世紀放送史』用に収録された証言

証言数：158件 収録時期：1993～2000	保存媒体：カセットテープ202本（デジタル化済み、一部テキスト化済み）
おもな証言者	肩書、内容など
長山節子	きょうの料理プロデューサー
金子辰雄	のど自慢担当17年のアナウンサー
福田雅子	元NHK大阪局ディレクター、被差別部落関連の番組制作など
高橋圭三	元NHKアナウンサー、「私の秘密」など
岩田安雄	「こんにちは奥さん」について
志村正順	元NHKスポーツアナウンサー
宇田川清江	「ラジオ深夜便」アンカー
伊藤松朗	CBC開局時のこと
山東迪彦	民放第一声の日
重村一	フジテレビの編成戦略
志賀信夫	放送評論家、「11PM」についてきく
松村由彦	NTV「ズームイン朝」
辻直正夫妻ほか	新潟局元劇団員
飯沢匡	「やん坊にん坊とん坊」「ブーフーウー」作・演出
松沢知恵	戦前のラジオニュース
竹田定七、亀井秀一郎、宮城悦二郎ほか	沖縄放送史
倉嶋厚	ウェザーキャスター
磯野恭子	山口放送
浅田孝彦	「木島則夫モーニング・ショー」企画
江藤淳	文芸評論家、放送史研究会
F.馬場、C.A.フェイスナー	戦後放送改革（大阪・シンポジウム）ABC主催
兼高かおる	ジャーナリスト、フリーライター

③放送史ききがき余話

証言数：50件 収録時期：1980～1989	保存媒体：カセットテープ76本（デジタル化済み、一部テキスト化済み）
おもな証言者	内容
高柳健次郎	「イ」の字が出た日について
斎藤基房	戦時中、戦地で使用した録音機を手作りした技術系の証言
吉田正	ソ連・グルムイコ全権が、サンフランシスコ講和会議で発言した『ノーコメント』を収録した職員
中山卯郎	中田喜直に「夏の思い出」の作曲を依頼したラジオ歌謡の担当者
志村正順	学徒出陣壮行会の実況を、第一人者であった和田信賢アナのピンチヒッターで担当したスポーツアナ
島浦精二	ロサンゼルスオリンピックの「実感放送」
坂本朝一	日本初のテレビドラマ「夕餉前」を担当した元NHK会長
春日由三、田沼修二、佐藤喜徳郎	春日旧友会長との打ち合わせ
岡本正一	アナ泣かせ野球放送
井口虎一郎	野次が渦巻く討論会
松沢知恵	室生犀星に「春の朝のウグイスを聞くような」声と言われた女性アナウンサー
青谷太郎	戦時中の「政党放送」にあたった業務局講演部職員
安藤照雄	芝浦仮放送所の112日

熊谷幸博	昭和20年から33年まで解説委員
山崎誠	「もく星号」事件(昭和27年4月9日)取材部デスク
田中達雄	「子供の時間」企画担当

④ テレビ創業期の人たちの証言集

証言者: 27名 収録時期: 1976～1977	保存媒体: 冊子(テキスト化済み)
おもな証言者	内容
春日由三	元NHK専務理事, テレビ放送開始の前年, 編成局長としてアメリカのテレビ界の事情視察
溝上銈	元NHK副会長, 技術者として黎明期からテレビ研究に一貫して参画
宮城島勝也	テレビ放送開始当初, 制作技術担当。創業期の技術革新に貢献
宮川三雄	昭和7年にアナウンサーとしてNHK入局後, 編成, 企画を経て技研テレビ実験班の責任者へ
大嶺昇	元NHK報道局長, 日映制作本部長から昭和28年にNHK入局
田畑雅	戦前はニュース映画カメラマン。創業期にNHKのカメラマン養成指導に当たる
大石吾一	本放送の初期, フィルム現像に従事
宮寺啓之, 矢作保次	テレビ放送開始当時, 横浜シネマ現像所で設備建設や現像処理方式の開発に従事
広田祐一	元富士フィルム勤務, テレビ用フィルムの開発, 国産化に努める
佐々木取造	テレビ創業期に日映からNHKへ移籍。テレビ用フィルム編集技術の発展に寄与
志村源二	昭和28年, カメラマンとしてNHK入局。初期のニュースや社会番組制作に従事
毛塚鉄三	昭和28年末にマキノ映画からNHKへ移籍。35ミリから16ミリへの転換を推進
奥村公示	カメラ商としてテレビカメラを中心とする機器の納入に尽力
胡桃沢友男	昭和22年NHK入局, ローカル局でラジオ番組制作後, 28年からテレビニュース制作に従事
原敬之助	朝日映画, 新理研映画を経て昭和28年NHKへ。元テレビニュース部長
渡辺躰	昭和20年10月復員後, NHKでラジオの社会番組担当。テレビ開局後は中継の分野で活躍
小田俊策	昭和15年NHK入局, 28年にテレビ報道班に移り, 初期のドキュメンタリーを制作
白石克己	昭和26年NHK入局, テレビ番組研究班などで実験番組を担当
大田善一郎	昭和24年NHK入局, 記者から映画部へ, ニュース担当のかたわらドキュメンタリー制作にも従事
吉田正信	昭和14年, アナウンサーとしてNHK入局。フィルム調達やニュース制作などに従事
古田信	昭和21年NHK入局, テレビ創業期にはテレビ班の経理を担当
青木一雄	昭和14年, アナウンサーとしてNHK入局。ラジオアナウンサーからテレビアナウンサーへ転換
芳賀三千生	昭和29年, 日映からNHKへ入局。テレビのBGM, 効果音の専門家として活躍
加太こうじ	評論家, 紙芝居の体験をもとに紙芝居とテレビを対比しながら独自の映像論を展開
桑野茂	日映出身の記録映画作家, 『ドキュメンタリーの世界』の著者
村山英治	短編映画会社社長, 映画からテレビへの手法継承に注目しながら映像論を展開

⑤ 放送史への証言

証言者: 24名 収録時期: 2003～	保存媒体: 一部, 音声データ保存(テキスト化済み)
証言者	内容(誌面タイトル)
近藤康男, 浜田成徳	占領下, 「放送委員会」が果たした役割 放送委員2人の証言
吉田直哉	雑誌に仕掛けられた「素顔論争」
村木良彦	「テレビプロダクション」の草創
小川宏	NHK, 「ジェスチャー」から民放, ワイドショー司会者へ
大塚利兵衛	現場に出るニュースアナウンサー
後藤美代子	テレビ一期生の女性アナウンサー
畑源成, 玉木存, 船久保晟一	「新聞に追いつき追い越せ」～報道現場3氏の回想～
深町幸男	ドラマづくりは阿吽の呼吸
小池晴二	テレビ放送開始 毎日映画を作った「NHKフィルムドラマの会」
渡辺裕英, 堀正芳, 篠原榮太	「制約」のなかの自由～テレビ美術・タイトルデザインの草創期, そしてこれから～
湯浅正次	テレビドキュメンタリーの青春期
金子鮎子	チャンスを作り夢をかなえる～日本初の女性テレビカメラマンが歩んだバイオニア人生～
三原康博, 山田満郎	テレビはもう一度「生」に戻れ～雑魚番組が輝いた! 美術デザイナーの楽しき挑戦～
藤竹 晁	現場から汲み上げる放送研究をめざして～「テレビのリアリティー」をどう理解するか～
増尾 豊	視聴者とNHKをつなぐ営業現場～受信料制度を支え続けた40年～
竹山昭子	戦前・戦中・戦後を通してみた体験的放送史
樋口秀夫	放送と視聴者をつないだ事業の仕掛け人30年の歴史
大場吉延	規格統一で揺れ続けたハイビジョン開発～MUSE開発からデジタル方式への転換まで～

⑥ 放送人の証言

証言数: 164件 収録時期: 1999～	保存媒体: 映像データ(一部テキスト化済み)
おもな証言者	職種
岡本愛彦, 高橋一郎, 八橋卓, 石井ふく子, 岡田太郎, 和田勉, 嶋田親一, 森川時久, 鴨下信一	ドラマ制作者
小倉一郎, 吉田直哉, 木村栄文, 磯野恭子, 藤井潔, 山崎俊一, 池松俊夫, 相田洋, 今野勉	ドキュメンタリー制作者
田英夫, 磯村尚徳, 勝部領樹	キャスター
橋本潔, 富樫直人, 石橋恵三子, 吉澤保, 坂上健司, 神山繁, 原恒雄, 栃木始	美術
村主彦, 湯浅正次, 金子鮎子, 葛城哲郎, 木村忠夫	カメラマン
藤倉修一, 武井照子, 杉山邦博, 井上加寿子, 吉村光夫	アナウンサー
藤尾孝, 吉本琢也, 菱田市彦, 宮本省二, 石川健太郎	技術
大和定次, 辻好雄, 作本秀信	効果
浅田孝彦, 柳沢恭雄, 宿谷禮一, 山室英男, 大越幸夫	報道

「きょうの料理プロデューサー」「のど自慢担当17年のアナウンサー」「CBC開局時のこと」「民放第一声の日」「ズームイン朝」「ジャーナリスト 兼高かおる」「フジテレビの編成戦略」など、NHKはもとより民放や他のメディア関係者も多い。事実関係の狭間を埋めるように、文芸評論家・江藤淳による「放送史研究会テープ」、内川芳美・東大名誉教授による勉強会、コラムニスト・天野祐吉、作家・エッセイスト・藤本義一、放送評論家・志賀信夫など、多彩な証言者が並ぶ。『放送五十年史』で描かれた歴史のその後に焦点を当てての証言を収集したことがうかがえるが、「玉音放送」を担当した報道副部長や「昭和15～21年のBK技術部」といったタイトルも見える。

③ 放送史ききがき余話

本誌のコラム『放送史ききがき余話』（1985年4月号～1986年12月号）に掲載された放送関係者の証言。収録期間は1980年から1989年で、カセットテープ76本に収められている。証言数は50件。デジタル化済み、一部テキスト化済み。

放送関係者に、黎明期や歴史的イベントに立ち会ったときの感慨を尋ねている。世界で初めてテレビの伝送実験に成功した高柳健次郎による「『イ』の字が出た日について」という対談が最初に収録されているのが目を引くが、そのほかにも興味深い証言が並ぶ。

「戦時中、戦地で使用した録音機を手作りした技術者の証言」、「ソ連・グルムイコ全権が、サンフランシスコ講和会議で発言した『ノーコメント』（その後流行語となった）を収録した、当時NHKからアメリカ留学中の職員」（カッコ内は筆者）、「中田喜直に『夏の思い出』の作曲を依頼したラジオ歌謡の担当者」、「学徒出

陣壮行会の実況を、第一人者であった和田信賢アナウンサーのピンチヒッターで担当したスポーツアナ、「日本初のテレビドラマ『夕餉前』を担当した坂本朝一元NHK会長」など。

④ テレビ創業期の人たちの証言集

テレビ放送がスタートした当時を知る人々の証言を集めて7巻にまとめた未公開資料。1976～77年、当研究所の職員がインタビューを行い、手書き原稿用紙を簡易印刷にかけて製本した状態で保存。テキスト化済み。

証言者は各巻ごとに、政策決定者、実験関係者、カメラ・フィルム関係者、ディレクター（ニュース関係）、ディレクター（社会番組関係）、その他の部内関係者（アナウンサー、経理など）、部外関係者（評論家、記録映画作家など）に分けられ、7巻で27名の証言を掲載。テレビ史研究の基礎資料として研究者が収集・編集した資料であるだけに、戦前におけるテレビ研究・実験の時代から1957年までの期間に活動した関係者・当事者がバランス良く網羅されている（本誌2011年7月号「放送史料 探訪」参照）。

テレビ放送開始の前年、編成局長としてアメリカのテレビ界の事情視察に赴いた春日由三・元NHK専務理事、創業期にNHKのカメラマン養成指導にあたった田畑雅、テレビ創業期に経理を担当した吉田信、紙芝居とテレビを比較しながら独自の映像論を展開している評論家の加太こうじの証言もある。

⑤ 放送史への証言

『20世紀放送史』刊行後、それ以降の放送史の基礎資料とするため、放送史に関わる関係者の証言を収録し、そのつど収録していくものとして、本誌2003年10月号から随時掲載。証言者は24名。一部を除き音声データが保存されている。すべてテキスト化済み。占領下、放

送委員会が果たした役割についての放送委員の証言をはじめ、NHKディレクター・吉田直哉と映画監督・羽仁進による「素顔論争」について、雑誌に仕掛けられたと語る吉田の証言、放送史研究者・竹山昭子らの証言がある。当時の執筆担当者の興味や専門領域が影響しているためか、証言者の人選にはやや偏りがある。筆者自身も何件か担当している。

⑥ 放送人の証言

放送人の交流を目的に設立された団体「放送人の会」によって1999年から収集され、現在までで164名の証言が映像データに収録されている。証言の一部はテキスト化済み。

「20世紀放送番組の革新にかかわった現場の放送人に、当時の放送現場の動きや経緯を語ってもらい、その証言を録画・保存するプロジェクト」(会ホームページより)で、そこにも謳うように、証言者は放送現場で実際の番組制作に関わった人がほとんどである。164件の証言のうち、職種別にみると、プロデューサー・ディレクター89件、アナウンサー・キャスター12件、技術16件、美術10件、カメラマン6件、効果5件、記者6件、などとなっている。

戦後、GHQの一員として来日、日本の放送に大きな足跡を残したフランク馬場、日本のニュースキャスターの先駆けと言われる田英夫、バラエティーに革命を起こしたプロデューサー・横澤彪、地方民放で戦争と平和をテーマにしたドキュメンタリーを制作し続けた磯野恭子らの証言がある。

インタビューは放送人の会のメンバーによるもので、同じ放送局の後輩が先輩の自宅を訪れて聞くといったケースもあり、リラックスした雰囲気で行われている様子が証言からは読みとれる。公式の場では語らない出来事なども

そのような雰囲気の中で不意に飛び出すこともあるだろうし、後輩相手に誇張して語っている可能性もある点は、考慮すべきだろう。

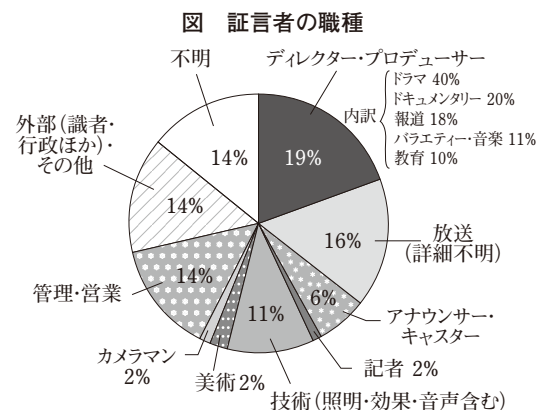
3. 研究方法

以上の口述資料を主要な研究素材として、研究に取り組む。研究は以下の方法で行う。

(1) テーマ設定

これまでに収集された口述資料のほとんどは、特定のテーマに沿ってインタビューしたものではないが、結果的に特定のテーマやジャンルに偏っていたり、何らかの傾向も読みとることができる。図は、①～⑥までの口述資料を、職種別に分類したものである。俯瞰すると、次のようなことが見えてくる。

第一に、職種には偏りがある。証言の数は全体で700件、そのうち「ディレクター・プロデューサー」が136件(全体の19%)と最も多い。続いて、「管理・営業」(14%)、「技術(照明・効果など含む)」(11%)、「アナウンサー・キャスター」(6%)と続く。職種の詳細は不明だが「放送」(16%)も含めると、全体の半数は放送現場に関わっていた人たちということができそ



注) 分母の700件は各口述資料に保存されている証言の合計で、中には同一人物による重複もある。

うだ。さらに、ディレクター・プロデューサーの内訳を見ると、そのうちの54件(40%)がドラマ関係者の証言で、次いで、ドキュメンタリー(20%)、報道(18%)の順となっている。ドラマのディレクターが多く、かつ、美術や効果、カメラマンの証言もあることから、すでにある証言を活用するとすると、「ドラマ」は材料の豊富なテーマである。また、図には表せなかったが、入社(局)年を特定できる証言者について言えば、1953年のテレビ放送開始前後に放送の世界に入った人たちが多く。したがってその時代に焦点を絞れば、多くの証言に当たることができる。テレビ草創期、ドラマを「生」で制作していた時代は、テーマとしてふさわしいと思われる。

第二は、女性の証言者の数である。参考までに、放送メディアで働く男女比を内閣府の『男女共同参画白書』で見ると、平成23年度、全従業員に占める女性の割合は、民放が21.1%、NHKは14.2%、平成11年度はそれぞれ20.7%、8.7%だった。現在、NHKの定期採用者の女性の割合は33.1%(平成23年度)と上昇してきたが、それでもなお、昔も今も、「放送界は男性社会」と言って異論はあるまい。さて、700件の証言のうち、女性の証言数は42件、全体の約6%である。証言をした人たちが現役であった頃は現在より明らかに「男性職場」であったことを考えれば、6%という数字は多いと言えるのかもしれない(ちなみに筆者がNHKに入局した1983年当時、女性の比率は6%であった)が、その数値の低さから見えてくることはなんだろうか。

放送界に限らず表舞台で活躍する女性の姿が取り上げられる機会は比較的多いが(女性初の、女性でありながら、との形容詞がつくこと

がほとんどだが)、陰で放送を支えた女性たちの声はどんな形でもあまり残っていないと思われる。一人ひとりが「オンリーワン」であった時代の女性たちの証言をひもときながら、今後、できる限り多くの職種の女性たちの証言を新しく収録することで、「放送ウーマン史」というテーマが設定できるのではないか。

第三に、表を眺めていると、既存の放送史研究では手薄とされてきたテーマも浮かび上がってくる。ディレクターの証言が多いことは前述したが、記者は2%に満たない。特派員も記者に含まれるとすると、海外を活躍の場とした人たちの証言が少ないように思われる(キャスターのカテゴリーに一部含まれている可能性はあるが)。また、ここで扱っている証言の多くは、放送史を編纂するため、ラジオやテレビの創業期の記録を残すために収録されたものがほとんどなので、どうしても当時の人が「過去」を振り返る形になる。70年代以降になってようやく発展・活性化した「国際化」についての証言が少ないのは当然かもしれない。

だからこそ、近過去である70年代以降は放送史として手薄な時代であり、今から証言を収集すべきである。70年代以降に発展を遂げた放送史に的を絞れば「放送の国際化」はキーワードになる。

(2) テーマについての

正史(オフィシャル・ヒストリー)をレビュー
テーマが決定したら、そのテーマについて、「正史」はどのような記述をしているかを検証し、背景的知識をまとめておく。たとえば、「正史」にあたるものとしては以下のような文献がある。

- ・『20世紀放送史』(日本放送協会編、2001)
- ・『放送五十年史』(日本放送協会編、1977)
- …ともに37ページ参照

・『TV-ART OF JAPAN』（日本舞台テレビ美術家協会編，1978）…テレビ番組を「テレビ美術」の視点で取り上げ、テレビ美術の歴史とその特色を写真入りで紹介した大型書籍。

それでは、現在のところ、最も長期間の記録を扱う放送資料『20世紀放送史』から初期テレビドラマについての記述を探すと、「第2部 テレビ時代—第3節 テレビの映像表現を求めて」が該当する。節を追っていくと、「1.ドキュメンタリー草分けの『日本の素顔』」，「2.新しいクイズ番組『私の秘密』」，そして「3.『私は貝になりたい』の衝撃」としてドラマの記述が登場する。

ここには、戦争の記憶がまだ残る1958年に、C級戦犯を描いて高い評価を得たドラマの背景が、シナリオも交えて詳しく書かれているが、その後は「人気ドラマ次々に」との見出しで、何本かのドラマが紹介されているにとどまる。テレビ草創期のドラマの記述はそれだけである。

テレビ開始とともに登場し、ドラマに不可欠であった「テレビ美術」にいたっては、『20世紀放送史』の索引にすら登場しない。専門書をひもとくと当然記載されてはいるが、「時代風俗考証、季節や地方色、登場人物たちの性格・生い立ち・生活レベル・経済力・物の考え方など…、これら多くの要素を基に構築されるドラマ番組の美術は、大道具（製作・操作）、小道具（置道具・持道具）、生花木、背景、電飾、衣装、美粧（メイク・かつら）…など多くのセクションの美術スタッフの作業によって支えられ、ドラマの映像空間のシチュエーションを創りあげていく」（中嶋隆美『TV-ART OF JAPAN』）というように概要にしかすぎず、ここからどんな人たちがどんな仕事をしていたのかを具体的に思



生放送時代のドラマ『不漁期』（NHK，1953年）

い浮かべることは難しい。

次に女性について見てみる。『20世紀放送史』の索引で「女性」を引くと、「女子技術員」と「女性アナウンサー」の2項目しかなく、ともに500字前後の「コラム」扱いだ。他に「新しい女性の職場」「活躍した女性たち」との項目で記述があるが、こちらもやはりコラムで、数人まとめて触れられているだけである（『放送五十年史』には索引すらない）。たとえば、東京オリンピック期間中、女子選手村で撮影を担当した日本初の女性テレビカメラマン・NHKの金子鮎子（「放送史への証言」「放送人の証言」に口述資料あり）についても、その歴史的事実についても、記述はない。

では、「国際化」というテーマについてはどうか。たとえば、初の大型国際共同制作番組として名高い『シルクロード』について、『20世紀放送史』はテレビ時代の第3節「共感海を越えて」の冒頭で、画期的な番組として多くのページを割いている。そして次に続くのは、「57か国で見られた『おしん』」で、最高視聴率62.9%をたたき出したこの人気番組が世界でも大評判となっていく過程が詳しく描かれている。しかしここで感じることは、海外との共同制作や、海外への番組販売・提供の「実務」がどのように行われたのか、読みとれないこ

とである。「おしん」のページには海外への提供と販売は「NHKインターナショナルとMICO（国際メディアコーポレーション）が行った」など、コラムに簡潔に記載されているが、ディレクターやプロデューサーなど番組制作者の談話が記事として取り上げられているのに比べ、実務者、つまりバックヤードの人々の声は聞こえてこない。

これらの例で考えられることは、「正史」はある放送史上の出来事を「客観的な事実」として大変詳しく記載してはいるが、その出来事にどのような人たちがどのように関わったかは見えにくいことである。

(3) テーマについての先行研究・関連資料・文献をレビュー

次に、テーマに関する先行研究や関連資料にも目を通す。ここでは、通常の研究に加えて、関係者・当事者が当時を振り返ったもの、専門家が解釈を交えながら論じているもの等を「先行研究・関連資料・文献」として扱う。「生ドラマ」をテーマにした場合を例にすると、以下のものがある。

- ・『テレビドラマ全史 1953～1994』（東京ニュース通信社、1994）…テレビ誌『TVガイド』を発行する東京ニュース通信社がNHK・民放各局の協力を得て編集したムック。前史から1994年まで、年代ごとに、当時の写真・新聞記事などをふんだんに使って記述。関係者へのインタビュー、その年に作られたドラマリストなどで構成。
- ・『日本テレビドラマ史』（鳥山拓著、1986）…放送構成脚本家・評論家によるテレビドラマ史。実験ドラマ時代から1985年までを、著者自身の解説・論評を交えてひもとく。
- ・『テレビドラマ』はどう変ってきたか—その

変遷と役割りをめぐる考察—」（大山勝美、岩波書店『文学』1985年8月号）…TBSプロデューサーによるテレビ番組を考察した論稿。日本のテレビドラマの特質、歴史とともに、著者自身のテレビドラマ論が語られる。

- ・「テレビジョンの研究(3) 座談会 テレビ美術という仕事」（日本放送協会編『放送文化』1958.5）…「テレビジョンの研究」シリーズの第3回。NHK美術課の大河内勲（装置、美粧）、佐久間茂高（美術課長、司会）、田辺スギ子（美粧）、芝田圭一（デザイン）、津田誠（製作進行）が、テレビ美術という仕事について語っている。

以上のような先行研究や関連文献をあたってみると、「客観的な事実」が具体的な「個人」の口を借りて語られるせいも、具体性を帯びてくる。

たとえば、ドラマ・プロデューサーの大山勝美は雑誌の論稿で、「電気紙芝居」という言葉を使って以下のように記述している。

「手さぐりの見よう見まねではじめられた『テレビドラマ』は、さいしょは惨たんたるものであったらしい。…粗末な機械、慣れないスタッフ。出演者はナマ放送で舞い上り、トチリはそのまま放送されたので、『テレビドラマ』は『電気紙芝居』と蔑視されていた」（『テレビドラマ』はどう変ってきたか『文学』）

「正史」であまり触れられていない、触れられていても専門家以外にはわかりにくかった「テレビ美術」についてはどうだろうか。

「座談会 テレビ美術という仕事」では、美術の仕事が隅々まで詳しく語られる。

「司会：いま、小道具で、テレビジョンのために確保してあるのは、点数にして、およそどの

位ですか。大河内：七千点位あるでしょう。…司会：芝田さんの方の管轄でユニット・ピースがありますね。たいへん苦勞して成果をあげて来ていますけれども…。大河内：あれは大変な数量です。五千点以上でしょう。芝田：大体の番組でユニット・ピースが使われていない場合はないですね。これについては、もっと力を注がなければならないと思います。…大河内：ユニット・ピースをもっと拡充するという意味において、今の製作のあり方を再検討しなければいけないと思っています」

こういったやりとりには、1958年当時の情報として記録すべき数値が語られているし、課題も明らかになっている。ただ同時に、司会も含め、すべて美術の担当者であることから、一般読者には「ユニット・ピース」¹⁾という専門用語がわからず、具体化したイメージを抱くことができない。支木、引き枠、道具帳といった美術の専門用語はほかにも注釈なく出てくるので、話の流れが見えづらい面もある（これは、編集の際に補足すればよいことではあるが）。

自分の経験に照らして言うと、座談会やインタビュー記事は誌面に物理的・内容的制約があることで、話をそのままの状態に掲載することは不可能である。語り口も編集されてしまうことがある。編集されて抜け落ちた部分にこそ、分析者として知りたい内容が含まれているかもしれないと思うことは多い。

(4) 分析

各テーマにしたがって正史、先行研究・参考文献を洗い出すことで、口述資料の分析に向けたいくつかのリサーチクエスションが浮かび上がってくる。たとえば「生ドラマ」では、以下のようなものが考えられる。

A. 技術的・物理的制約の中でのドラマ制作現



テレビ美術の仕事「大道具」(NHK, 1962年撮影)

場の実態・雰囲気はどのようなものだったのか。B. テレビとともに生まれた「テレビ美術」とは、具体的にはどのような仕事だったのか。

こうしたリサーチクエスションを設定したうえで、口述資料を詳細に分析していくことになる。その際、次の2点に留意したい。

① 文書資料で語られてきた「正史」との対比を意識する。

たとえば、上記のリサーチクエスションAに関する証言では、こんなものがある。

「つねに困ってたのは、いい本がないってことだよ。つまり『日真名氏』はじめて、一度としてほくは、この本はよかったなってのよ。大体ね、しょうがねえなと思ってやってんの。本がつかまないと、せめて場所移動しなきゃなんないと、場所移動するにはロケやるしかない。それでロケが始まっちゃった…」(高橋太郎 元TBSプロデューサー 1999「放送人の証言」)

この証言は、「正史」では、「スタジオでの生放送の途中、ロケフィルムを挿入する手法を初めて取り入れた」(『20世紀放送史』)と記述されている。推理・探偵ものの先駆的番組『日真名氏飛び出す』(1955～62年・KRT(現TBS))について担当プロデューサーが語ったエピソードである。この番組については先行研究でも、「『スピード感ある展開、映画以上に快適なテン

ポ』をねらい、ロケによるインサート・フィルムも駆使した』（『日本テレビドラマ史』）とあるし、高橋プロデューサー自身が、「アクションドラマはストーリーのおもしろさに加えて、テンポも必要になるんです」（『テレビドラマ全史』）と、当時タブーと言われたロケに踏み切った理由を説明している。

この例では、正史は「テンポをねらってロケを始めた」と書くが、実際の担当者は「脚本がつまらないので否応なしに」と語り、食い違いを見せる。同じ人物でも書籍とインタビューで食い違った証言をしている。これこそがオーラル・ヒストリーの醍醐味の一つである。しかし、分析によって正反対の結果を期待すること、「正史」を書きかえることが本来の目的ではない。単純に正史をなぞるのではなく、対比軸を設定することによりテーマに多面的な光を当て、歴史を複眼的に見ることができる。そこに意味がある。

② 証言が行われた「場」、語り手とインタビューアーとの「発話行為」（誰に対して、どういう状態で語ったか、等）を意識する。

リサーチクエスションBに関するものでは、1950～60年代にかけてテレビ美術に関わっていた人たちの証言が、2000年以降に、放送関係者によるインタビューで引き出されている。40年前の仕事について、彼らは、ついこの間のことのように詳細に語っている。

「昔の日本教育テレビ（現：テレビ朝日）が六本木に開局したときに、麻布十番でお花屋さんをしていたものですから、番組の中で花を生けてくれということで。兄が生けに行ったのついていって、そばで見っていました。やはり若い女の子のほうがいいということで、じゃあ、次からは私が行って…。当時はみんな生放送

でしたが、そのときにお花を生けて。…今度は『イモを買ってきてくれ』、『何か飲み物を買ってきてくれ』などとなって…。一緒に買いに行き始めました。要するにその当時でいう消え物²⁾なんですけれども…。スタジオの中でいろいろ手配をしたりしていたのが最初のきっかけでした」（石橋恵三子 テレビ朝日・消え物担当 2006「放送人の証言」）

「昔テレビが開局する前ですよ…都電を降りた停留所の横に交番があるんです。風呂敷包みを持っていたら、おまわりさんに職務尋問された。…風呂敷の中に入っていたのが、おまわりさんの制服だったんです（笑）。たまたまエノケンのサイズのやつなんです。…その風呂敷を開けろと言うので、開けたらおまわりさんの制服じゃないですか。『君、これ、ちょっと着てみ』、そこでサイズがぴったり合うんです（笑）。小さいですからね、サイズがね、合っちゃうんですよ（笑）」（栃木始・東京衣装、テレビ朝日 2007「放送人の証言」）

歴史学の領域では長い間、文書資料に比べて、口述資料は下位に置かれることが多かった。それは、口述が記憶や伝承に頼るところが多いため客観性に欠けるのではないかというある種の“実感”に基づくものであろう。口述資料の「信頼性」については、オーラル・ヒストリー研究の第一人者であるポール・トンプソンが『記憶から歴史へ』で詳述するように、文書資料と口述資料は、どちらか一方が他方より優れているということはない、というのがこの研究の立場である。語られた「証言」は中身だけでなく、いつ、どのように収録されたものなのか、証言者とインタビューアーの関係性はどうか、などの「場」と「発話行為」を精査することによって信頼度を増す。そしてその注意

点は、文書資料を扱う場合についても、同様に意識すべきものだろう³⁾。

上にあげた証言例は「客観性」という意味では劣ったとしても、「発話行為」と「場」を考慮した場合（同じ時代に放送に携わってきたいわば仲間による、リラックスした状態でのインタビュー）、一定の信頼性があると考えられる。彼らの証言から、テレビ開局とともに発生した「テレビ美術」の仕事について「具体的に」思いをはせることができる。

4. 今後の課題

収録された証言を使用する場合、もどかしさは当然発生する。証言者が故人である場合も多い。証言の「場」や「発話行為」が明確に特定できない場合、どの程度まで証言を読み解くことができるかは、課題の一つである。

そして、「オーラル・ヒストリー」が「歴史に声を残す機会の少ない人々の声を丁寧に聞き取り、そこから個人と社会と歴史の関わりのダイナミズムを描き出していく研究」（酒井順子、2008:83頁）だとすれば、「マス」メディアである放送を出す側からの証言だけで、放送史を構築できるのかという問いかけもあるだろう。「正史」以上に、目指さなければならない視点のように思える。放送の受け手＝視聴者の「オーラル・ヒストリー」を収集することにより、放送史はより厚みを増すだろう。収集の方法についても検討が必要だ。

これらの課題についても解決の道を探りながら、新しい放送史研究を進めていきたい。2013年からの新シリーズに期待していただくと幸いである。

最後に、筆者が先日参加した「オーラル・ヒ

ストリー学会第10回大会」のテーマセッションでの、いたく勇気づけられた講師の言葉を紹介して、この小論を閉じたい。

「研究に必要だと思えば、資料に突撃するしかない。それが口述資料であれ文書資料であれ。ためらっては研究者とは言えないでしょう」（伊藤康子・愛知女性史研究会、元中京女子大学短期大学部教授）

口述資料とは、挑み甲斐のある資料である。

（ひろたに きょうこ）

注：

- 1) 一定の規格寸法によりつくられた大道具の単体をユニット・ピースと呼ぶ。この数十種のピースを組み合わせた変化により多角的に共通使用する。（日本放送協会編（1981）『NHK テレビ美術読本』）
- 2) 番組の意図により、飲食したりこわしたり燃やしたりして消耗するものをいう。タバコやビールなど。（日本放送協会編（1981）『NHK テレビ美術読本』）
- 3) オーラル・ヒストリーの方法論については、桜井厚（2002）、桜井厚・小林多寿子編（2005）を参照

参考文献：

- ・大山勝美（1985）『「テレビドラマ」はどう変ってきたか—その変遷と役割りをめぐる考察—』『文学8月号』岩波書店
- ・酒井順子（2008）『市民のオーラル・ヒストリー—歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部
- ・桜井厚（2002）『インタビューの社会学』せりか書房
- ・桜井厚・小林多寿子編（2005）『ライフストーリー—インタビュー—質的研究入門』せりか書房
- ・「テレビジョンの研究（3）座談会 テレビ美術という仕事」（1958）『放送文化5月号』
- ・東京ニュース通信社（1994）『テレビドラマ全史 1953～1994』
- ・鳥山拓（1986）『日本テレビドラマ史』映人社
- ・日本舞台テレビ美術家協会（1978）『TV-ART OF JAPAN』
- ・日本放送協会編（2001）『20世紀放送史』
- ・日本放送協会編（1977）『放送五十年史』
- ・廣谷鏡子・松山秀明（2012）「オーラル・ヒストリーを用いた新しい放送史研究の可能性」『放送研究と調査1月号』
- ・ポール・トンプソン著／酒井順子訳（2002）『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店